令和８年　第10回大河原町教育委員会定例会会議録

１　招集日時　　令和８年10月16日（金）　午後２時00分

２　招集場所　　大河原町役場　４階　議員執務室

３　出席委員　　一盃森広志委員、丹羽宜博委員、林恵美子委員、片倉亜寿香委員、
鈴木洋教育長

４　説明のため出席した者
櫻田尚　教育総務課長、齋修　生涯学習課長、千葉康弘　学校教育専門監、

５　開　　会　午後２時00分

６　令和８年第９回教育委員会定例会会議録の承認について
鈴木教育長｜（委員全員に諮って）承認する。
林委員、片倉委員　署名。

７　教育長報告
（１）一般事務報告　なし
（２）専決事務報告　なし

８　議　　事
議案第35号　大河原町教育委員会の権限に属する事務の管理及び執行状況についての点検及び評価について
教育総務課長、生涯学習課長より説明。

丹羽委員	質問ではないが、中学生が学校に行くのが楽しいとあった。今までこのようなことがあっただろうか。何でそれを言うかというと、小学生が実はそうではなく、自己肯定感が少なく、良いところはあまりないという回答が多い。何か逆ではないかと思う。小学生あたりは本当は小学校が楽しくてしょうがなければいけないというのが本当なのではないかなと私は思う。 中学校になると教育のレベルも高くなるし、部活動もあるし、自分の思うようにならないこともたくさんあるので、むしろ負担になることが多いと思う。中学生の方が自分にも良いところがあるし楽しいということは、相手も良いところがあるという肯定感が強い。ただ、そうだとしたらもっと成績が良く

	なってくると思うが、そこは少し矛盾を感じる。それでも良くなるというのはいいと思う。
鈴木教育長	これは昨年度のデータで、今年度のデータは教育長報告の資料にも載せているが、「学校に行くのは楽しいと思いますか」という質問に対して、小学校では87.6%で、全国値よりも1.9ポイント高くなっている。
丹羽委員	それは安心しました。
鈴木教育長	中学生は 84.6%で、だいたい全国値と同じ。100%になってくれると良いと思う。
丹羽委員	そうしたら不登校生がいなくなりますね。
鈴木教育長	そうですね。ゼロになると思う。
丹羽委員	本当にそうだと思う。家にこもっているより学校に行っているのがずっと楽しいということになってほしい。
鈴木教育長	その他ありますでしょうか。
林　委　員	一つ少し気になったところがあり、質問とかではないのだけれども、２の「家庭・地域の姿」の基本的方向４　家庭・地域の学びや活動の支援というところで、子育て世代の保護者の学び支援として、家庭教育講座はとても大切なことだと思っている。どこでそれを支援すれば保護者たちは助かるのかなと思うと、やはり未就学の段階で保護者にこういうふうに子供たちを一緒に育てていきましょうね、手を繋ぎましょう、みんなで育てていきましょうということを伝えたいと思うが、その渦中にいる方々がこういう講座に参加してくだされば一番いいし、参加してる方にはすごく成果が上がっていると思う。 必ずみんなが来るところで、そういう講座のようなものを開いているのかお聞きしたい。
生涯学習課長	講座として開催して集まってもらっている形ですので、皆が集まってくるというところでは、実施できてないとは思う。
林　委　員	何とかそこに手が携えられるようなことができないものかと考えている。そうするとその就学してからの子供たちが、保護者が少し支援をもらえるんだという気持ちの安定があれば、子供にもそれは良い影響が出るのではないかなというふうに思っていたので、そういったことが今年度、来年度と少し考えていけたらいいなと思いながら、この結果を理解してたところである。 低学年の不登校の増加の背景に、親世代が仲間とか社会とかと繋がれていないという問題が結構あるのではないかと思っており、講座でなくていいので、子育ての悩みだとか、こういうときにはどうしたら子供たちの成長を支えることができるのかということを話題にできる、いろいろな機会があればよい。そのようなことを、例えば子ども家庭課とかにもう少し工夫していただくなどしてもらえたら良いのではないか。 やはり今、大河原町で心配なのが低学年の段階からの不登校であり、そうす

	ると、そこを何か助けてあげることが今大事なのではないかと思う。
教育総務課長	前回の定例教育委員会でも少し申し上げましたが、今年度から 5 歳児健診を行うことになっております。子ども家庭課が主体になりますが、今までは 1 歳半健診、3 歳半健診でそこで終わっていて、その次はもう就学時健診まで何もなかった。そういうことで、こども家庭庁のほうで切れ目のない支援体制を整備する目的で行うようにという通知があり、大河原町ではいち早く 5 歳児健診を行うこととしたもの。その際に、子ども家庭課だけではなく、我々教育委員会や福祉課、そういった関係課も一緒に参加して、子供たちを診ているあいだに保護者の方達を別室に集めて話をきいていただくことにしており、11 月から始まる予定となっているものです。
林　委　員	それはよかった。やはりそういうところを皆さんに知っていただく。本当に地域も含めて皆で考えていきましょう、近くの子供たちに声をかけてあげてくださいとか、ということも皆で考えていけたらいいなというふうに思ったので聞けてよかった。
鈴木教育長	これは大きな課題であり、多くの自治体も悩んでる。今回 5 歳児健診を新たに実施することになり、これはチャンスだと思う。
林　委　員	本当にチャンスである。皆が受ける場所であり、希望して講座とかに参加されない方々、参加することが難しい方々にもそういったことを聞いていただけるという。すごく良いことだと思う。
丹羽委員	これは未就学児の話であるが、実際にはもう学校に来ている子供たちで、今 PTA に入っていない親もいると思う。そのため、保護者が全員参加というような研修を学校で行えば良いのではないかと私は思う。 そういう話にふさわしい方を招いて、保護者全員参加という何かうまい方法がないだろうか。
鈴木教育長	片倉委員、どうですか。
片倉委員	PTA 総会に参加しているが、参加者は年々減っていく。親子行事は小学校で年に 1 回必ずあるので、そうすると、低学年だとご夫婦揃って参加が多いが、中だるみではないが、間の学年になるとお母さんだけで、最後の学年になるとお父さんも来るということが多い。そうするとやはり初めと最後にこういう話を聞く機会があれば、お父さんとお母さん両方に聞いていただけるので良いのかなと思う。 あと、先ほどの 5 歳児健診の話を聞いて、私も 3 歳児半健診のあとに、もう小学校に入る前まで健診がなく、話を聞く機会や聞いてもらうのが、幼稚園の先生だったり、あとは幼稚園のお友達のお母さんと話す機会もあるけれども、そんなには無かったので、やはり 5 歳児健診で話を聞いてもらったり、自分の気になってることを言えるという機会があるというのはすごく良いなと思った。

一盃森委員	今の話のことで言うと、組織横断的な取り組みということで、5 歳児健診のときにというような紹介があった。もうやはり子供を町全体、地域として育てていくんだということを本当に具現化していく、と考えたときには、絶対にそのような取り組みが必要なのだと思う。 なかなか組織で横断的に皆が集まってというのはなかなか大変であり、そういうふうにすればいいのにというのは頭ではわかるのだけれども、仕事を進める上で本当に大変なことである。そういうことを大河原町がいち早く取り組んでいくということは、やはり今後に向けての認識として、町当局が本当に真剣に取り組んでいるという表れだと思うので、ぜひ今後に期待していきたい。 そのようなことが続いて、どのように変わるのか、どのような成果が生まれてくるのかというのはこれからの話であるけれども、100%というのはなかなかやはり難しいことであり、より多くの方々がそのことに関わられるようなことで進んでいければ良いのかなと思ってお話を伺っていた。 それで、そのことに加えて、学力と合わせて体力の低下のことが課題ということを教育長も挙げておられたが、それこそ大河原町ではスポーツまちづくり推進課という新しい課も出来て、教育委員会から離れた部分もあった。また、体育館（はねっこアリーナ）でも指定管理者が変わったりということで、明らかに運営の仕方が変わったし、そこに参加する町民の参加の仕方も変わってきたと私は思っている。それでだが、例えば今回、町政 70 周年記念式典のときに楽天イーグルスから銀次選手と岡島選手か来られたし、リガーレ仙台もそうであるが、中学校の部活動だけではなく、子供が親と一緒で良いと思うので、より多くの方々に参加していただく機会を作っていくことも大事なのではないかと思う。 なぜこういうことを言うかというと、もう、私たちの頃はと言っていられなくなっている。もう世の中が変わっており、町とか担当しているところで機会を増やしていくということも一つアプローチの仕方としてはあるのではないかと思う。これからどんどんそういった機会を活用しながら、学校体育だけではなく、いわゆる社会体育の充実ということも含めて、子供や世代も含めて、地域を挙げて取り組めるような取組みが大事なのではないかと思う。

議案第 36 号　大河原町障害児就学審議会委員の委嘱について

教育総務課長より説明。

鈴木教育長	（委員全員に諮って）可決する。

９　その他

（１）教育長報告

１　『つまずきから学ぶ算数』

（１）教師のつまずき７（笠井健一）

（２）つまずきを生かす授業への提言

大きな１点目は、算数でのつまずきについて。前教科調査官の笠井健一先生の、教師のつまずき７と、つまずきを生かす授業の提言いうことで、明星小学校の先生方が書かれた論説について紹介。

最近つまづずき関連の本が多く出版されていて、やはり今までだと、わかっている子の考えだけを拾い集めてまとめに持っていく、もうわからない子がないがしろにされた授業ではないかというふうに言われていた。

石井先生もそうであるが、つまずきとか間違いとか、そういうものを宝物にして授業を推進していくことが重要だと言っており、大河原小学校でもそのような取組みをしているほか、町内でもそういう授業がなされている。

（２）の明星小学校の先生方の「つまずきを生かす授業への提言」ということで、やはりそこでもつまずきは学級全体の学びのチャンスだ、というようなことを述べており、主体的・対話的で深い学びとは、自分の考えが揺さぶられ、修正され、更新されていく経験を積み重ねること。つまずきはその中心にあるというような考え方で、間違いとか、そういうものを生かしていく授業をしましょう、ということが書いてある。

２　『子どもの「困り方」に寄り添う算数授業』（田中博史）

大きな２点目は、筑波大学附属小学校の田中博史先生が書かれた『子どもの「困り方」に寄り添う算数授業』ということで、やはりつまずき、間違い、困り方を大切にしていくことが大事だと述べている。

その中で田中先生が、ペアトーク（ペア対話）が乱用されているとおっしゃっている。最近町内の授業を見てもこれが多い。はいとわからない、だから隣の人とお話してごらんとか、近くの人と相談してごらん、そして 30 秒も経たないうちに「はいやめ」と言う。これは何のためにやっているのかと思う。もう少し時間を与えてやるとか、あるいは何回もではなくて、大きな課題のとき、ここぞというときに、そのペアトークを入れるとか、そうやらないと子供たちも話さなくなるというように書いている。

それから町内でもこのペア対話が多いのだけれども、その効果的な利用というのはこれから探っていかなければならないし、乱用すると本当に子供が喋らなくなると思う。

それから二つ目が、まとめの書かせ方である。先生がまとめの文章書くよ。黒板に書いて、それを写して終わりとか、あるいは感想を書いてくださいというと、「楽しかった」、「面白かった」で終わる。そういうことを何度積み重ねても全然力にならないということである。田中先生は毎時間ではないが、１時間算数の授業をしたら、次の国語の時間に１時間たっぷりとって書かせる。お友達の意見を聞いて、こう変わったんだというようなところを書かせていく。そういうものが大事なのだということをおっしゃっている。

３　『ことばを味わい読みをひらく授業』（石井順治）

（１）読むこと　学び合うこと

（２）「学び合う学び」が成立するとき

大きな 3 点目は石井順治先生の著書で、『ことばを読み味わい読みをひらく授業』で、やはり石井先生も前半部分でおっしゃっているが、人と人の繋がりの希薄化というのが課題であって、社会的な大きな問題になっている。そういうことをもう 20 年前に石井先生が書かれているということ。多分その頃からそういう兆候はあって、急激に最近子供会の組織率がここ数年で大きく低下してきた等、そういうような保護者あるいは地域住民の意識が別なほうにいっていると思う。石井先生の書かれたコミュニケーション力の育成とか学び合う授業というのを、やはり学校で「人と人との繋がり」というものを教えていくしかもうない、というようなことが書かれている。

それから、知識伝達型の一斉授業というのを脱却してということであるが、体に染み付いているそのやり方が、なかなか別な型、柔軟な姿にならないというようなことがある。これから少しずつ子供中心の、教師が目指すのではなくて子供が活躍する、そういうような授業を展開していく。そうすると子供も、自己肯定感も満足感も高まってくると思う。先生から言われたことを言われた通りにやる。それだけではやはり満足感なんて得られないと思う。

４　未来につながる教室－群馬県島小学校（大江健三郎）

大きな 4 点目が 6 月に石井先生が講演でおっしゃっていた、島小学校のルポを書いた「未来につながる教室」。ノーベル文学賞を取られた大江健三郎氏が若いときに 2 日間だけ島小学校に行ったことを書いたもの。私は本だけは持っていて今回紹介させていただいた。大江氏は、島小の子供たちが「農村ジュニアの顔」と表現し、その顔は感動する顔、信頼を持っている顔と表現している。

５　全国学力・学習状況調査質問紙調査結果

大きな 5 点目が、全国学力・学習状況調査の質問紙調査結果と、１０月１日に宮城県教委から仙台市を除く宮城県平均正答率が公表されたので、改めて学力調査結果も添えたもの。

６　大河原中学校３年国語小説「百科事典少女」授業記録

大河原中学校の日野愛心教諭の国語、小説「百科事典少女」の授業記録を載せたもの。３年生の授業であったがとても感動した。子供たちが本当に考えていた。

こういうような文学作品の授業を中学 3 年生が一生懸命考えて、非常に素晴らしいなと思った。やはり全体の話し合いの中で変わってくる。考え方がどんどん進化してくる。深い学びになっていく。ただ一つ、竹田幸正先生にも観ていただいたが「音読」が入っていない。国語の授業で、文学作品を読むにあたって「音読」を代表生徒にでもいいので読

ませたかった。

７　算数チャレンジ大会（算チャレ）2026

９年ぶりの宮城県１位となった。参加小学校は１６２校、参加チームは５２７チーム、参加児童は１，５８１人。本選に進んだチームが３２チームで、うち大河原町から３チームが本選に進んだ。その中で、大河原小学校「ＳＭＳ」が得点８０点で１位に輝いた。大変素晴らしいことである。陸上でも全国大会に行った生徒がおり、今後齋町長への報告会を行う予定である。非常に嬉しいと思う。

８　「いじめられる側にも理由がある」

8 番目は「いじめられる側にも理由がある」で並木浩子先生が書かれたもの。

新任のときに上履きに画びょうを入れられたり、落書きされる。これはよくあること。

やはり子供が不安定だと、そういうようないじめが発生する。人間関係がうまくいっていないことだと思う。そのときに、ある子からいじめはいけないってわかってるけれども、いじめられる側にもいじめられる理由があるんだと言われたときに、明確な答えを返すことができなかった。人権教育の研修を受けて、全ての子供が楽しい学校生活を送る権利を持っているのだ、そうやって嫌がらせをしても問題解決にならない、相手をにちゃんと気持ちを伝えて関係を調整していくことなのだ、そういうこと学んで今だったらそういうことが言えるというようなことだと書いている。

９　モンスター・ペアレント論を超えて（小野田正利）

（１）無断録音による「いじめの証拠」集めが高度化・多様化

（２）志のある教師が去っていく「法化社会」化した学校

（３）「仲が良い」ことが大きなリスクになる「いじめ法」の厄介さ

大きな 9 点目で、「モンスターペアレント論を超えて」で小野田正利先生の論説。

内緒話をスマホを置いて無断録音して、いじめの証拠にするとかそういう事態が発生している。日本は監視社会、法化社会になっていることを紹介している。

１０　就学時健康診断時における不登校児童生徒の健診について

今年初めて実施したもので、不登校児童生徒のために就学時健診のときに不登校児童生徒の健診を実施したもの。その時点での不登校生徒数 44 名で、そのうち 7 名は各学校で校医受診した。その残りの 37 名の児童を対象に今回案内を出しており、実際に来た子供が 7 名いた。保護者の方と一緒に来ていた。明るく受診していて良かった。健康状態を見てもらう機会は大事であり、これからも続けていきたい。

１１　その他

（１）　金ケ瀬中指導力向上研修 2 年国語「字のない葉書」

（２） 大河原中・金ケ瀬中バレーボール合同練習会①
（３） ＯＨ！かわら楽校④「ニジマスつかみ」等
（４） 高校入試対策講座・国語編
（５） 文化講演会「近代文学における仙南地方」
（６） 大河原小指導力向上研修５年算数「図形の角」
（７） 高校入試対策講座・数学編
（８） 町政施行７０周年記念パネル展
（９） 大河原中・金ケ瀬中バレーボール合同練習会②

写真記録等について資料により説明。

丹 羽 委 員	大江健三郎氏の島小学校の記事について。農村ジュニアの顔と言っているが、輝いていたのだろう。子供達がね。そのことが素晴らしくて感動されたんだと思う。おそらく、当時のその子供たちは、皆が仲良くコミュニケーションを取って、授業以外は遊び回ってたのだろう。 いまの子供たちはあまり外を歩っていない。みんな家の中にいてゲームをしているか、あるいは塾に行っているとか、あとサッカー教室に行ったりとかいろいろあるかもしれないが、昔みたいに外で遊んでいる子供はほとんどいなくなっているのではないかと感じる。 石井先生がおっしゃっていたが、学び合う授業ということで、コミュニケーションの基本は話すことよりも相手を尊重し、慎み深く聞く。なかなかこの余裕がなくて、授業もはい終わりとなってしまう。だからそういったところもとても大事なところだと思う。
一 盃 森 委 員	沢山お話したいことがあるが、まずは石井先生の前半部分の話と、小野田先生のモンスター・ペアレント論を超えてについて。小野田先生の今回のケースはもう究極だと思う。学校の先生方が子供に言葉一つをかけるのにビクビクドキドキしながらやらなければいけないような書き方までしている。すごく前半の部分というのが、今現在の学校教育活動そのものが乖離しているというか、私達が望む、こうありたいと頑張って取り組んでいる方向と実際に現実社会とが動いている、向かっている方向が乖離している、非常に危うい感情を感じたところから始まっている。 やはり、それでもというふうなことしか言えないと思うが、石井先生の「読むこと　学び合うこと」の 30 ページをさっきお話いただいたが、例えば乳幼児期における人と繋がり合う体験があまりにも乏しくなっている影響が非常に大きいということで、個人主義化ですよね。 だから、例えば大河原町で言えば、ケアハウスで取り組んでいる「ＯＨ！かわら楽校」ような取り組みが大事だというように評価されている。 やはり私はそういう意味でいうと、社会体験や自然体験だとかという体験の

	活動、経験ですよね。、そういうふうなことに触れた経験というのを、やはり行政というか、こちら側が用意して準備してあげる。参加する数が多い少ないというよりも、まず取り組む方法として、そういうふうなものを持っているという。そういう意味で言えば、現在作成している「ふるさと探求　おおがわら学」について、探究的な学習の取り組み、アプローチというのもすごく期待して楽しみにしている。 大江健三郎氏の話について。やはり時代だと思う。言われている、書かれていることはそうであるが、やはり作家としての言葉遣い、当時だがら許される表現ではないかと感じながら読ませていただいた。
丹　羽　委　員	一盃森委員の話を聞いていて、とりあえず小学校の先生は子供から好かれなければならない。基本的に私はそれしかない。宇野千代さんも好かれていた。まず、学校教育と自分の生き方というのは違っていいわけだが、中学生ぐらいになったらやはり筋を通さなければならない。いいことはいいし悪いことは悪い、そのことを判断できる能力がついていなければ具合が悪いので、そのときに嫌われてもいい。でも、そのとき嫌われたとしても。あの時に先生はこういうことで自分にいろいろと言ってきたのだなというようなことで実はそうなのか、となるぐらいの方が私は良いと思う。とにかく子供の将来の幸せを願って育む教育であってほしいというのが私の願いである。
林　委　員	石井順治先生の資料を読み、それから大江健三郎氏の島小学校の資料を読んで、家に「島小学校の教育」という、斎藤喜博先生が書かれた本がありますので、それを久しぶりに読むことにした。それでその本は、出版年を見たら自分の生まれる前で、60 年以上も前に喜博先生が学校で先生たちに指導しながら実践していったその授業記録なのだが、その中に大造じいさんとガンの最後の部分の授業記録が載っており、その対話する子供たちと先生の詳細な記録があって、その中に先生が自分自身の発音を果たしてこの発音でよかったのだろうかと苦悩しながら、子供たちの反応を見ながら、一生懸命考えて、対話を続けるというリアルな場面が描かれていた。それで、その私の中で、それが石井先生の書かれている授業記録ときちっと重なっていくというか、目指していっての挫折もあって、でも大事と言いながら、繋いでくださって良い授業とはこういうものだよと教えてくださり続けてきたということを、また再確認することができた。 それでその授業の中で考えると、先生も子供たちも作品に対して本気で取り組んでいて、ときには苦しいほど悩むのだけれども、そういう悩みつつも、子供たちから学ぼうとする気持ちが常にある。そういう姿は、やはり昔も今も尊い。不易の部分だと思いながら、そうやって紡ぎだされた子供たちから出てくる言葉というのは、そこからまた子供たち同士の、そうだったんだという感動を生んで、納得の感動というか、そういうのが起こってくるという

	ことを、また読み返したことで熱くなったもの。 60年以上も変わらずに良い授業を求め続けてきた先輩先生方のそういう思いを受け継ぎつつ、学びつつ、今大河原町の先生方がそれを実践しているということが、すごく尊く、嬉しく思った。 日野先生の授業記録を見てもそうだし、松崎先生の授業記録のときもそういうことを感じていて、やはり良いものというのはいつまでも引き継がれていくものだというふうに思って、ぜひ大河原町の先生方がそういうものを学び続けていらっしゃるということを誇りに思って、実践を失敗してもまた繰り返す、実践を続けていただきたいなというふうに思ったことが一つ。 もう一つは全国学力学習状況調査の質問紙調査結果の方を見て、学力は点数で出てくるので、こうなのだと受け止めているが、質問紙調査をじっくり見てみると、その中に、私は教員として長く勤めていたので、親子はどうなのかなという、違う視点で見たいという思いがあり、その親や家庭に学校の悩みを子供たちは話していますか、という項目があり、そこを見たときに、小中学校ともに高い。そこが大河原町良いところ、親と子供が悩みが打ち明けられる関係にあるんだということをすごく嬉しく思った。 一方で、負の部分を見たときに、ほとんど話さない、全く話さないの割合が小学校で26%、中学校で22%という数字を見て、２割？待ってと思い、１人でこの子たちは悩んでいるのと心配になったのと、あとは前回も話題になった、ＡＩに相談しているか、というところが少し心配だと思った、その部分を深追いはしていないのでわからないんが、そこの部分がちょっと二極化してるのかなと思った。嬉しい反面、負の部分も抱えているなというふうなことを感じて心配になった。 それから最後の方の質問で、教科について好きですか嫌いですかとある。あの質問はよくないと思う。好きか嫌いかで聞くのは少し乱暴だなというふうには思うが、この中で少し心配というか気になったのが、国語は好きだし、わかる、うまくやれてるように数値が出ている。でも、算数が好きではなさそうで、少しまだ不十分そうということで、そのことが今後の学力に影響してこないかということを少し心配している。あと英語も心配だと思った。 この該当学年がどうこうと言うのではなく、学校で学ぶ教科が好きと言い切れなくても、嫌いにはなって欲しくないなというふうに思った。特に小学校とかは算数を研究教科にしてたりする。大河原町に限らず自分の学校でそれを力を入れて頑張りたいと思っている教科は、少なくとも嫌いにはならないで欲しい。興味があるな、やってみたいなという、好きとか大好きでなくてもいいから興味を持っている、取り組みたいというふうに思っている状態でいて欲しいなという願いを持った。
片倉委員	私は全国学力調査と学習状況調査を見て、小学6年生は受験する数は少ない

と思うが、学習時間2、3時間というのはすごく多いなと思った。中学3年生は、たぶん学習調査をしたときには部活働をまだしている時だと思うが、それでも学習時間が少ないなと思った。
林委員もおっしゃってたが、この算数と数学の好きな割合がすごく低いと見ていて、それなのに小学6年生の算数チャレンジで上位になる子や、それに参加するような子と、苦手な子の二極化というのを感じた。
この初めの方の6ページぐらいにあった、つまずきを生かす授業だったり、困り方に寄り添う算数の授業のように、小学生からつまずきから自分で気づいて前に進めるよう、寄り添った授業を先生たちにしてもらえたら子供たちが自信がついて、少し好きに繋がるんじゃないかなと思う。そうするとこの学習調査のアンケートもだいぶ少しずつ変わっていくのではないかなと思った。でも学校だけではなく、家庭でも子供への声がけは必要だと思う。
あと、部活の時間が今、月曜日と木曜日はやらなくなり、3年生の場合はもう帰って受験勉強とか少し学習する時間を取れると思うが、1、2年生であれば放課後をちょっと利用して、残ってクラスで友達と宿題をしたり、わからないところを教え合ったする時間が欲しいと思う。帰ってくると、宿題を早々に終わらせてやりたいこと、ゲームだったりが始まったりするので、それが週2回増えるという、それはもったいないと思う。それだったらちょっとでも、小学校のときは多分6年生のときは放課後に残って、先生がわからないところがあれば見ますよというのがあり、算数は先生が見てくれた。それが急に中学校になるとないので、そうすると多分自分の自由な時間が増えてしまい、それはいいんことではあるけれども、そうすると少し学習時間の定着というのが減るのではないか。中学校で週1回でもそういう時間を作っていただいたら、ちょっと違ってくるのではないかと思った。
せっかく小学生のときは意欲があったのに、中学校になったら一気に減ってしまうのがもったいなと思う。

（2）各課長報告

教育総務課長、生涯学習課長

令和８年度行事予定について説明。

１０　次回教育委員会の開催日程について

鈴木教育長｜次回の定例教育委員会は令和8年11月20日（金）午後2時から開催する。

１１　閉会宣言　午後3時30分

令和8年11月20日

署名委員

署名委員